

# 高崎隆治と戸田城聖研究

——回想・方法・継承——

塩原 将行・伊藤 貴雄

## シンポジウムの趣旨

伊藤 今日ご紹介するのは、戸田城聖の研究者である高崎隆治という人物です。1925年生まれで、今年が生誕100周年に当たります。今日は、前回のシンポジウム（「斎藤正二と牧口常三郎研究」、本誌本号所収）でも登壇された塩原将行さんと、私で担当いたします。

最初に塩原さんのご紹介をしておきますと、創価教育研究所の客員研究員をされています。『評伝 牧口常三郎』に続いて、『評伝 戸田城聖』を執筆されました。これが1冊400ページほどの非常に分厚い本で、上下2巻から成っています。そのご執筆者です。

また、私は博士論文をショーペンハウアーで書き、先日ベートーヴェンに関する本を出しましたが、実はこの2冊とも、今日ご紹介する高崎隆治という学者に影響を受けて執筆したものです。今から20年前に、私をベートーヴェン研究でデビューさせてくれたのも高崎隆治でした。ですから今日は、歴史研究の内容と同時に、そうした個人的な思い出も出てくると思います。

この「創価教育論」という15回授業の中では、戸田城聖という人物を扱う機会は、あまり多くありません。牧口常三郎については4回、池田大作については7回扱っていますが、戸田については1回です。これは軽んじているということではなく、牧口・池田に比べて、学術的な研究が進んでこなかったという事情によります。将来、もっと戸田を扱う回数が増えるように研究が蓄積されてほしいと願っています。

戸田は、牧口から見れば教え子に当たり、池田から見れば先生に当たります。いわば中間に位置する存在で、創価大学の建学の理念を語る際には、牧口・戸田・池田と3人並べて語られることが多いわけですが、戸田の研究はそれほど多くないのです。今日は、現時点で戸田城聖研究において望み得る、第一線のエキスパートとして塩原さんにお越しいただいていますので、戸田についてもたくさんお話を伺えるのではないかと考えています。

---

Masayuki Shiohara（創価大学池田大作記念創価教育研究所客員研究員）

Takao Ito（創価大学文学部教授）

本稿は2025年10月27日に大学科目「創価教育論」で行われたシンポジウムの記録である。本稿の作成に際して、上原淳司氏より校閲ならびに有益な助言をいただいた。



高崎隆治氏近影

『創価大学学生平和論集 第三集』（創価大学学生平和論集編集委員会編）所収

ここで重要なのは、戸田城聖を研究する意味とは何か、という点です。詳しくは後ほどお話ししますが、今日取り上げる高崎隆治という人物は、20世紀後半の日本で活躍した文学研究者の一人です。高崎は、前回取り上げた斎藤正二と同様、創価学会の会員ではありません。斎藤正二は晩年に創価大学で教鞭を執りましたが、高崎隆治は創価大学の教員でもありません。つまり、長い研究キャリアをもつ一人の文学研究者が、学問的関心から戸田という人物に焦点を当てて研究を行ったということです。これが一体どういう意味をもつのか、そこが今日の大きなテーマです。

高崎隆治は、戦時下の文学やジャーナリズムの研究者として知られています。その視点から戸田城聖に光を当てたわけですが、彼には明確な研究上の命題、すなわち方法論上の重要な方針がありました。それは、「戦時下の言論や行動の一切は、その時代のコンテキスト、すなわち歴史的な文脈の中で考えなければ、何一つ理解することはできない」というものです。高崎は、戸田という人物を、近代日本の歴史において重要な一人の人物として捉え、その意義を考えようと思いました。

今日は冒頭の30分ほどを、私から戸田城聖の人物像の紹介に充て、足りない点は、戸田研究のエキスパートである塩原さんに随時補っていただこうと考えています。その後高崎隆治の戸田城聖研究をめぐるシンポジウムへと進めていきたいと思っています。

## 戸田城聖の生涯

伊藤 戸田城聖は、1900年に生まれ、1958年に亡くなりました。その生涯は、日露戦争、第一次世界大戦、満州事変、日中戦争、第二次世界大戦、日米開戦と敗戦、さらに戦後の朝鮮戦争、ベトナム戦争と、まさに戦争が連続する時代と重なっています。戸田城聖は、そうした時代を生きた思想家でした。同時代の思想家としては三木清や戸坂潤がいますが、彼らと同じく、

戸田城聖もまた戦時下を牢獄で過ごしました。戸田という人物を理解するためには、戦争の歴史を抜きにして考えることはできません。

戸田城聖は1900年、石川県に生まれました。生まれたときの名前は甚一（じんいち）です。1904年、4歳の頃に一家で北海道の厚田に移住します。このあたりの詳しい背景については、塩原さんの著書をご参照ください。厚田は当時、漁業で栄えた土地でした。そこで戸田は小学校教育を受けますが、彼を教えた教師たちは非常に個性的で、後に北海道の郷土文学史に名を残すような作家たちでした。青年教師として戸田を教えた彼らが、後に北海道では著名な文学者になるのです。この事実も、塩原さんによって掘り起こされたものです。

私は、一人の人間が歴史に爪痕を残していく背景には、その人を支え、育てた多くの人々の存在があると考えています。皆さんが今日、創価大学で学び、この授業を受けているという事実の背後にも、皆さんを送り出してくれた多くの人がいるはずです。それは両親だけではなく、小学校や中学校、高校の先生、塾の講師、親戚、友人など、さまざまな人々でしょう。皆さん自身も、そうした人々から陰に陽に影響を受けてきたのではないのでしょうか。私は、そうした出会いや影響こそが、人間にとって最も大切な成長の契機だと思っています。

さて、戸田城聖は、働きながら学んだ人物でした。家業の事情から、いわゆる高等教育への進学を断念せざるを得ませんでした。丁稚奉公をしながら勉学を続け、検定試験に合格して教員となります。北海道の真谷地という地域で教壇に立ちました。

時間の関係上、ここでは要点のみを述べますが、戸田は19歳前後で上京します。北海道の先輩であり、教育界で活躍していた牧口常三郎を頼ったのだと思われます。さまざまな縁をたどって牧口の勤める学校を訪れ、対話するなかで、戸田の内に眠っていた教育者としての情熱が呼び覚まされたのでしょう。このとき何が起こったのか、その詳細は明確には分かっていませんが、戸田が牧口を慕い、「牧口のような教育を自分はどうすれば実現できるのか」と考え始めたことは確かです。

興味深いのは、戸田が牧口と同じ学校にとどまるのではなく、途中から独自に学習塾を立ち上げた点です。時習学館と名づけられたこの施設は、現在で言えばフリースクールや学習塾に近いものです。戸田はまだ23歳という若さで、いわばベンチャー的に教育事業を始めたこととなります。

当時の日本では受験制度が急速に整備され、子どもたちや親の意識は次第に受験へと向かい、「受験地獄」という言葉が時代を象徴するキーワードとなっていました。この時期、日本で大学などの高等教育へ進学できた人は、人口のわずか1～2%程度に過ぎません。激しい競争社会の中で、戸田の塾から学び、後に東京教育大学教授になった歴史学者の和歌森太郎や、東京大学教授になったドイツ文学者の山下肇といった学者もいます。

その後、戸田は中央大学の予科に学び、英語の教員免許も取得します。そして30歳を迎える前後には、学習参考書の分野で大きな成功を収め、「受験の神様」とも呼ばれる存在になります。1929年には『家庭教育学総論 中学学校入学試験と愛児の優等化』という本を

著しており、こうした著作の存在も、塩原さんによって歴史の中から発掘されました。この時期の戸田は「城外」と名乗っていました。

1930年、牧口の『創価教育学体系』刊行に先立ち、『創価教育学原理による推理式指導算術』という算数の学習参考書を出版します。この本は最終的に100万部を超える発行部数を記録しました。現在でも1万部売ればベストセラーとされることを考えると、当時として驚異的な数字です。

この算術教育については、昨年まで本学学長を務めた教育学者の鈴木将史教授が、『推理式指導算術と創価教育』という本を著しています。戸田の算数教育は、算数問題を考えること自体が、すでに価値創造への第一歩である、という発想に立っています。その意味については、ぜひ皆さん自身で考えてみてください。関心があれば、鈴木教授の著書を手にとってみてほしいと思います。

その後、戸田は雑誌編集者としても活躍します。戦前・戦中には雑誌編集に携わり、牧口とともに教育のための雑誌や、学習参考書を数多く刊行しました。特筆すべきは、国定教科書に対しても盲従せず、国の命令どおりには必ずしも従わないという姿勢を明確にしていた点です。軍国主義教育が強まる時代にあって、そこには自由な精神が表れていました。

また、戸田は小学生向けの学習雑誌『小学生日本』を創刊します。その後小学校が国民学校に改称されたことに伴い、『小国民日本』と改題。1941年、文部省は小学校を「国民学校」と改称し、それにより、児童は「少国民」と呼ばれるようになりました。これは「少（わか）い国民」という意味で、「将来、国家のために命を捧げる国民となれ」という思想が込められていました。ところが戸田は、同じ発音でも「小さい国民」という意味の漢字を用い、異なる価値観を示しました。こうした姿勢は当然、監視対象となり、雑誌は改題を余儀なくされ、最終的には廃刊に追い込まれます。このことの歴史的な意味を明らかにしたのが、今日ご紹介する高崎隆治です。この件についてはあとで改めて触れます。

さて、戸田は、大衆文学の出版でも重要な役割を果たしました。北海道時代から面識のあった作家・子母澤寛の『大道』を出版し、大道書房を設立します。佐藤春夫、長谷川伸、野村胡堂、久生十蘭といった著名な大衆小説家を擁し、最盛期には17社もの関連会社を経営していました。

しかし、戦時下の出版界は極めて厳しい状況に置かれていました。政府は紙の配給を通じて出版社を統制し、少しでも批判的と見なされた出版社には紙を配給しないという方法で圧力をかけました。そうした中で、戸田は自由な教育と表現を守ろうと、ぎりぎりまで抵抗を続けたのです。たとえば、英米が「鬼畜」と罵られていた時代に、戸田はイギリスやアメリカの文学を子ども向けに紹介しました。子どもたちに、世界へと開かれた視野をもってほしいという強い思いが、そこにはあったのだと思います。

牧口常三郎と戸田城聖は、1943年に治安維持法違反と不敬罪の容疑で逮捕されます。日本の戦争に対して非協力的である、あるいは天皇制国家に対して不敬である、といった理由

が挙げられましたが、実態としては国家による言いがかりでした。その結果、牧口・戸田は約二年間、獄中生活を送ることになります。牧口は1944年11月に獄中で老衰により死去しました。

戦争末期、敗戦直前に戸田は釈放されますが、その時点で日本社会は深刻な飢餓状態にありました。国民の多くが栄養失調に苦しみ、1943年には栄養失調を原因とする結核患者の数が日本史上最大となっています。そうした状況のなか、牢獄の中で十分な食事が与えられるはずもなく、戸田は極度の栄養失調状態にあり、もはや長くはもたないと判断された可能性もあります。そのため、敗戦の約一か月前に出獄することになります。

しかし戸田は、出獄後すでに日本の敗戦を予感し、戦後を見据えて出版事業再開の準備を進めていました。敗戦からわずか五日後には、通信教育講座の解説書を準備し、各新聞社に広告を打ち出します。こうした迅速な行動の一つひとつが、どのような順序で行われたのかについては、塩原さんの著書に詳しく記されています。

この頃から戸田は、自らの名を「城聖」と名乗るようになります。私たちが今日知る「戸田城聖」という名前は、戦後に確立された呼称だと言えます。戦後、戸田は『民主主義大講座』などの書籍を刊行します。このシリーズには、室伏高信や今中次麿といった論者が関わり、さらに日本の立憲政治の象徴的存在であった尾崎行雄が推薦文を寄せています。この推薦文の存在も、近年になって塩原さんによって確認されました。

このように戸田城聖は、戦前・戦中・戦後を通じて、多様な思想や自由でリベラルな言論を守ろうとした出版人であり、言論人でした。戦後も、子どもたちのために『冒険少年』という雑誌を創刊します。この児童向け雑誌の編集長に、当時20歳前後で抜擢されたのが、若き日の池田大作でした。

晩年の戸田は、青年育成に力を傾注します。戦時中の栄養失調の影響により、心臓疾患などの内臓疾患や、その他複数の病を抱えながらも、若い世代に良質な教養を身につけてほしいと願っていました。また女性に対しては、男性に従属する生き方ではなく、自立した主体として新しい時代を切り開いてほしいとの思いから、女性のための読書会も主宰していました。そこで取り上げられたのは、『水滸伝』『三国志』、アレクサンドル・デュマの『モンテ・クリスト伯』、ヴィクトル・ユゴーの『九十三年』、ヘンリック・イブセンの『人形の家』など、古今東西の文学です。戸田は、こうした作品を青年や学生たちに徹底して読ませようとしました。

一方で、戸田は自ら、また恩師である牧口常三郎の生涯を描くために、小説『人間革命』の執筆を開始します。実は「人間革命」という言葉は戸田の造語ではありません。もともとはカント哲学に由来する概念であり、それを東京大学総長であった南原繁が「人間革命」と訳しました。戸田はこの南原の言葉に強く共鳴し、どれほど政治制度を改革しても、根本である人間が歪んでいれば政治もまた歪むとして、人間そのものの変革こそが重要であると明言します。そして「人間革命」を、自らの思想と実践の中心に据えていくのです。

1957年当時、日本は二度の原爆投下に加え、第五福竜丸事件によって、いわば三度目の被曝を経験していました。こうした状況を背景に、戸田は「原水爆禁止宣言」を発表し、原爆・水爆、すなわち核兵器の廃絶という理想を世界に向けて訴えます。しかし、戦前からの病が重なり、1958年、戸田城聖は58歳の若さで亡くなりました。その生涯は、戦争と抑圧の時代にあって、言論と教育、人間の尊厳を守ろうとし続けた歩みであったと言えるでしょう。

以上、戸田城聖の人生を、駆け足で概観しました。ここには、戸田城聖の評伝をお書きになった専門家である塩原さんがいらっしゃいますので、塩原さんのほうで、もし補っていた点があればお願いいたします。

### 戸田城聖を研究する意味

塩原 最初に、今年、私自身も見つけて嬉しかった話からさせていただきたいと思います。料理愛好家の平野レミさんをご存知の方はいますか。番組を見ていた際に、平野レミさんのご家庭の話が出てきまして、お父さんの話になりました。実は、お父さんが、ここに持ってきましたが平野威馬雄さんという方で、児童文学を書いている作家なんです。そこで私は驚いて、「レミさんのお父さんが平野威馬雄さんだったのか」と思いました。

この平野威馬雄さんは、先ほど紹介された戸田先生の出版社から本を出しているのです。しかも刊行時期が、戸田先生が牢獄に入る一年前、いや半年前くらいの時期に当たる。平野レミさんのお父さんはアメリカ人と日本人のハーフで、当時は何かと目をつけられやすい立場でもありました。実際に憲兵や警察に引っぱられ訊問されたこともありました。そうした中であっても、子どもたちに本当に良い本を届けようとして、正面から、ぎりぎりまで努力していた。そのことを、私は改めて実感しました。

続いて、戸田先生について学ぶことの意味を、3つ挙げておきたいと思います。第1に、牧口常三郎について勉強したい、もっと深く学びたいと思う方がいるとしたら、牧口常三郎という人物を最もよく知っているのは誰か。それは、戸田城聖です。ですから、戸田先生を学ぶことは、牧口常三郎の姿を正確に学ぶうえで、必須だと私は考えます。

第2に、戸田先生は時習学館をつくり、またそれ以前には北海道の真谷地という場所で小学校教員も務めました。戸田の教育を一言で表すなら、「どんな劣等生も優等生にしてみせます」という言葉に尽きます。皆さんの中で将来、学校の先生を目指している方は、当然、さまざまな子どもたちと向き合うことになります。その中には対応が難しい子どももいるでしょう。そうした子どもたちを、どうすればのびのびと、その子らしく伸ばしていけるのか。そのヒントは、戸田城聖の教育を学ぶことで得られるのではないかと思います。そのために非常に大事な本としては、『推理式指導算術』の前に出版され、戸田先生の教育の総論に当たる『愛児の優等化』という書籍があります。ここには、勉強が得意でない子を、どのようにして勉強できる子にしていくかが、体験的に書かれており、非常に参考になるはずで

第3に、創価大学の創立者は池田先生です。この池田大作という人物が、最も影響を受け、

最も尊敬したのは誰か。それは当然、師匠である戸田城聖です。したがって、戸田城聖について学ぶことは、創立者について、より正確に、より深く学ぶことにもつながると思います。それでは、戸田城聖に学ぶ際のポイントは何かという、いわゆる「戸田大学」と呼ばれる部分です。戸田大学という場で、池田大作という一人の青年を育て上げ、世界のさまざまな知識人や指導者と対等にやり取りできる人物に育て、また多くの人々の幸福を切り開いていくリーダーへと導きました。そういう意味において、戸田城聖を学ぶことは、池田大作という人物をより深く知ることにもなるのです。

最後にまとめます。いわゆる牧口・戸田・池田という三代を貫いて流れているものは、一体何なのか。途中で投獄されたり、池田先生の場合も会社が倒産して大変な思いをしたりしながら、それでも一歩も引かずに戸田城聖についていった。なぜそういう生き方ができたのか。それは、それぞれが牧口という人物に、戸田という人物に、「本物の人間」を見たからだと思えます。

では、「本物の人間」とは一体何か。戦前に国際連盟の事務次長を務めた国際人、新渡戸稲造という著名な人物がいますが、この新渡戸が『創価教育学体系』の序文を書く際に、次の趣旨のことを書いています。すなわち、牧口常三郎が目指しているのは、単に目の前の子どもたちの幸福だけではない。世界の民衆、全民衆の幸福を願っていることが、牧口の思想の中に現れている、という指摘です。これは戸田城聖も、さらに池田大作という人物も、生涯を通じて貫いてきた部分ではないかと思えます。

したがって、この「創価教育論」の授業においても、聞いた話をそのままにするのではなく、今度は自分で学ぶという形で、そうした人物が一体どのような人物だったのかを、自分のペースで考えていく。その中で、自分の中に一つ、尊敬できる存在を見いだしていただければよいのではないかと——私はそのように考えております。以上です。

伊藤 今、戸田城聖の教育思想の側面についてのお話がありましたが、私も一つ、ここで触れておきたいことがあります。それは、『推理式指導算術』の「推理式」という言葉の意味です。

推理というのは、推測するということです。それがなぜ「価値創造」や「創価教育」という理念と結びつくのか。この点については、先ほどご紹介した鈴木教授の本を読んでいただくとうまく分かるのですが、簡単に言えば、戸田は当時の算数の受験問題を徹底的に検討し、基礎的な問題から応用・発展的な問題へと順序立てて配列しました。そして、学習者が独学によって数学の核心に到達できるよう、全体を設計していたのです。

興味深いのは、20世紀後半の日本を代表する哲学者の一人である鶴見俊輔が、この『推理式指導算術』について言及している点です。鶴見俊輔はハーバード大学で学び、93歳で亡くなるまで日本思想や西洋哲学について語り続けた人物ですが、晩年に、戸田城聖の推理式指導算術を自学自習したことで自分は高等教育まで進むことができた、と述べています。創価学会というと宗教団体のイメージで語られがちだが、自分は戸田城聖の書いた本によっ

て学び、勉強が好きになることができた。だから自分には戸田城聖に対する学恩がある——鶴見俊輔はそのように語っているのです。

ですから皆さんも、鈴木先生の『推理式指導算術』の入門書をぜひ手に取って、自学自習してみたいと思います。算数や数学と聞くと、「自分は苦手だ」「もう無理だ」と、その時点で拒否反応を示す人もいるかもしれません。しかし、できるものから始めてください。基礎問題と応用問題を比べて、何が同じで、何が違うのかを考える。戸田は、これを「同等性と差異性を見いだす練習」だと言っています。そうした思考の積み重ねが、新しい状況に直面したとき、過去の経験をどのように応用すればよいかを見極める「応用の知性」を育てるのです。

価値創造とは、まさにそういうことです。今までなかったところに、新しいものを生み出す。これまでの時代と、これからの時代の間、何が同じで、何が違うのかを見極める。皆さんはこれから、未曾有の人工知能時代を生きていくことになります。今年は「AI エージェント元年」とも言われていますが、同時に世界を見渡せば、戦争、ナショナリズム、ポピュリズム、排外主義が各地で噴き出しています。こうした時代において、過去と未来の同等性と差異性を見極め、これまでの経験から何を応用できるのかを考える。その思考の原点が、実は算数の中にもあるのだ、ということです。

以上を踏まえて、戸田城聖という人物の歴史的意味をまとめておきたいと思います。先ほど塩原さんが、牧口を知るため、池田を知るため、そして学びを中心とする教育を知るための3点を挙げてくださいました。

それに加えて、私からも3点挙げたいと思います。まず、戸田城聖は偉大な出版人であったという点を強調したいと思います。日本では、学者や出版者というと、エリート中心で、学者が書いた難解な本や、いわゆる純文学が研究対象になりがちです。しかし戸田は、推理小説や大衆小説といった、多くの人が日常的に触れる文学にこそ力を注ぎました。その意味で、日本の大衆文学史、大衆文学雑誌史において極めて重要な人物です。

また、高崎隆治が評価しているように、戸田は戦時下の雑誌編集者として、権力や軍部の意向に全面的に屈することはありませんでした。当時の出版社は、多かれ少なかれ政府の方針に従わざるを得ませんでしたし、したがって、戸田の雑誌にも政府の意向が反映されている部分があることは否めないでしょう。しかし、高崎は、「日本のすべての雑誌を精査してほしい」と述べた上で、「100%軍国主義的な雑誌も存在する中で、戸田はその度合いを最小限に抑えようとした。その努力が活字からひしひしと伝わってくる」という趣旨の評価をしています。戦時下の言論史を理解するためにも、戸田城聖という人物は欠かすことができません。

そして最後に、戸田が最晩年に行った「原水爆禁止宣言」です。なぜ戸田は、核廃絶こそが最も重要だと考えたのか。核兵器は生命軽視の象徴であり、人間の尊厳を損なうものである——戸田はそう見抜いていました。今日、ようやく核廃絶を訴える団体がノーベル平和賞

を受賞する時代になりましたが、戸田はその半世紀以上前に、この問題を正面から提起していたのです。その意味で、戸田城聖は、核廃絶という20世紀の最重要課題に向き合った、先駆的な思想家の一人として再評価されるべき人物だと私は考えています。

戦時下で抵抗した雑誌編集者として、日本の大衆文学の支援者として、そして核廃絶という人類の未来を見据えた思想家として——戸田城聖は、そうした多面的な評価に値する人物である。私はそのように考えています。

## 高崎隆治の略歴

伊藤 以上のような見方について、私が何よりも大きな影響を受けたのは、これからお話しする高崎隆治という人物からでした。ここから、今日の主題に入っていきたいと思います。最初に高崎の略歴を紹介しておきます。

高崎隆治は1925年に神奈川県横浜で生まれ、2013年に88歳を迎える直前に亡くなりました。法政大学文学部を卒業し、戦時中は学徒兵として戦争の現場に送られ、一兵士として非常に過酷な体験をしています。戦後は高校教師として、また大学の非常勤講師を務めながら、戦時下文学、戦時下ジャーナリズムの研究に生涯を捧げました。

十五年戦争、とくに太平洋戦争中、日本の著名な文学者や作家の多くは、戦争に協力していました。率直に言えば、九割以上が戦争協力をしていてよいでしょう。しかし戦後になると、多くの人がその事実を忘れたかのように振る舞い、あたかも初めから平和主義者であったかのように語り始めます。高崎隆治は、そうした偽善的態度を決して許しませんでした。

高崎は、戦時中に実際に何が起きていたのかを明らかにするため、作家たちの行動や発言を徹底的に調査しました。ありとあらゆる出版物、雑誌、日記、書簡を精査し、戦時下文学研究、戦時下ジャーナリズム研究という未踏の分野を切り拓いていきます。戦時下文学研究という分野が本格的に注目されるのは、ようやく近年になってからですが、高崎はその半世紀以上前に、この研究に取り組んでいたのです。

高崎は最終的に、非常勤講師として教える道を選びました。専任教員になると業務に追われ、研究時間が奪われることを避けたためです。収入は減りましたが、その分、時間を研究に注ぎ込むことを選んだのです。彼は、自費で、いわばボランティアのような形で、戦争中に作家たちが発表した出版物を全国から集め続けました。戦争協力をした作家の中には、戦後、自らの戦時作品を焼却した者も少なくありませんでした。しかし高崎は、古書店や倉庫などを巡り、残された資料の一つひとつを確認し、日本の戦時下言論が実際にはどのようなものであったのか、記録を発掘して分析しました。

インターネットもない時代に、自ら書き、自ら印刷し、発表し続けたその成果が、やがて書籍として結実したのが『戦争文学通信』です。高崎は、文学とは有名作家の作品だけを指すのではなく、戦争で命を落とした無名の兵士たちの詩集や手記も、正当に文学作品として

評価されるべきだという立場を貫きました。

また、高崎は戦時下の雑誌資料をほぼ個人で収集し、国立国会図書館にも所蔵されていない資料を数多く所持していました。国会図書館から寄贈を求められた際にも、「自分の研究に一寸も支援しなかった機関に、なぜ生涯をかけて集めた資料を渡さなければならないのか」として、これを断っています。その貴重な研究資料は、最終的にご遺族の手によって創価大学池田大作記念創価教育研究所に寄贈されました。

高崎隆治は、戦時下ジャーナリズム研究の第一人者であり、また大手出版社——たとえば文藝春秋社や新潮社——が戦争中にどのような形で戦争協力をしていたかについても、厳しく検証しました。高崎が編集顧問を務めた『昭和万葉集』（後述）の版元である講談社に対しても、例外ではありませんでした。

さらに高崎は、戦争史研究、とりわけ南京事件の研究においても先駆的な役割を果たしました。南京事件については、事件否定論から大虐殺説まで多様な見解がありますが、高崎は、日本軍が南京に進軍した際に参加していた作家たちに注目しました。これらの作家が書いた戦場レポートを徹底的に収集・分析し、その記述をもとに、高崎は少なくとも約20万人の中国民衆が犠牲になったと結論づけています。この見解によって、高崎は日本の右派勢力から攻撃を受けましたが、それでも事実を事実として冷静に見つめる姿勢を崩しませんでした。日本最初の南京事件研究会においても、高崎は4人の先駆的研究者の1人でした。

戦争は人間を変えてしまう——これは多くの作家が戦争体験の中で語ってきたことですが、高崎は、その変質を感情的にではなく、事実に基づいて記録し、反省することこそが歴史研究の責務だと考えていました。日本軍による慰安所の設置や毒ガス開発といった問題についても、公開資料だけでなく未整理資料を収集し、日本史研究として後世に残しています。

1996年には、その長年の功績、とくに著書『従軍作家・里村欣三の謎』に対して、京都大学人文科学研究所から表彰を受けています。この著作についてもものちほど触れようと思います。

こうした多面的な業績を踏まえると、高崎隆治は、戦後日本を代表する偉大な人文科学者の一人であったと言えるでしょう。とりわけ、戦場における女性作家たちに光を当て、戦争とジェンダーの関係を掘り起こした点も、高崎研究の重要な意義の一つです。

### 里村欣三研究・戸田城聖研究

伊藤 高崎隆治の代表作の一つに、『従軍作家・里村欣三の謎』という本があります。日本の作家の多くが戦争に協力していった時代にあって、里村欣三という作家は、もともと日本軍に強い嫌悪感を抱き、徴兵忌避した人物でした。当時、徴兵忌避は、発覚すれば投獄に処されるほどの重罪でした。そのため里村は、本名を隠し、別名を用いて作家として活動を始めます。非常に過酷な境遇を生き抜いた作家だったと言えます。

里村欣三は最終的に再び戦場に送られ、戦争の中で命を落とします。ところが戦後、生き

残った作家たちは、あたかも里村欣三が日本の戦争に積極的に加担した作家であったかのようになり、戦争責任を彼一人に押し付けるかのような言説が広まりました。

これに対して高崎隆治は、里村欣三が書いたあらゆる作品、書簡、資料を丹念に調査します。その結果、里村が軍隊内での抑圧やいじめの経験をもち、日本国家によって排除された不幸な人々に寄り添おうとした作家であったことを明らかにしました。彼の従軍経験は、日本の戦争を賛美するためのものではなく、むしろ戦争の現場がいかに過酷で、悲惨なものであるかを冷静に見つめる視点に支えられていたのです。

さらに高崎は、里村欣三が最終的には日本を脱出しようとしていたのではないかと、という仮説を立てています。以上のような高崎の研究によって、岡山県（和気郡福河村、現在の備前市日生町）出身の里村欣三は「忘れられた作家」から再評価される存在となり、2010年には里村欣三顕彰碑が建立され、記念行事も行われるようになりました。その記念事業には高崎自身も関わり、現在、記念碑には高崎隆治の里村研究の言葉が刻まれています。

さらに興味深いのは、高崎が調査を進める中で、里村欣三が戦時中の創価教育学会——すなわち牧口常三郎・戸田城聖による戦時下の創価教育学会——の会員であったことを突き止めた点です。里村は戦時中、創価教育学会の仲間たちに宛てて手紙を送っていました。こうした事実から高崎は、創価教育学会という存在が、戦時下の日本において、国家権力によって排除されがちな弱い立場の人々を包摂する場であったのではないかと、という問題意識を抱くようになります。

加えて高崎は、戦時下ジャーナリズムの研究を進める中で、一冊の奇妙な雑誌に注目します。それが『小国民日本』という雑誌でした。当時、文部省は児童のことを「少国民」という漢字で表記していましたが、その雑誌では「少」ではなく「小」という字が用いられていたのです。しかも、戦意高揚的な内容が極めて少なく、「のびのびと、明るく」といった編集方針が掲げられ、イギリスやアメリカの児童文学が紹介されていました。

高崎が発行人を調べると、そこには「戸田城外」という名前が記されていました。横浜出身の高崎は、戸田城聖が神奈川で「原水爆禁止宣言」を行った人物であることを知っていたため、最初は親族ではないかと考えます。しかし調査を進めるうちに、「戸田城外」が戦時下における戸田城聖のペンネームであることを知ります。

こうして高崎隆治は、自らの戦争史研究、文学研究、ジャーナリズム研究のすべてを背景として、戸田城聖という人物研究へと深く踏み込んでいくこととなります。その過程で、忘れられた作家・里村欣三の著作集を編集したり、講談社の『昭和万葉集』全20巻という大規模編集事業の編集顧問を務めたりと、日本文学史研究においても非常に重要な役割を果たしました。

そうした仕事をふまえ、改めて戸田を中心にまとめた研究が、『戸田城聖——1940年の決断 軍国教育との不屈の戦い』です。この著作は、1940年前後、日本の文部省が「少国民教育」を通じて、子どもたちを将来の兵士として育てようとしていた時代に、戸田城聖が「子どもた

ちは元気に、のびのびと、明るく、強く育つべきだ」という教育理念を打ち出し、子どもたちの命と人生、幸福を守ろうとしたことを、文献に基づいて実証的に明らかにしたものです。

当時の小学校一年の国語教科書、いわゆる「サクラ読本」では、「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」という有名な一文の少し後に、「ススメ ススメ ヘイタイ ススメ」という文章が配置されていました。つまり、桜が散るように命を捧げよ、という思想を子どもたちに刷り込む教科書だったのです。昭和一桁世代、1930年前後に生まれた人々は、皆この教科書で教育を受けました。戸田城聖は、こうした軍国教育のもとに置かれた子どもたちを何とかして守りたいという思いから、雑誌編集を続けていた。そのことを高崎隆治は、徹底した文献調査によって明らかにしました。

### 高崎隆治との出会い

伊藤 以上、高崎隆治とその戸田城聖研究について、私の方から簡単にご紹介しました。ここからは、塩原さんと私とで、当時の思い出を語り合いながら、高崎の戸田研究の意義を考えていきたいと思います。まず塩原さんにお伺いしたいのですが、最初にご縁ができたのは、どのようなきっかけで、いつ頃のことだったのでしょうか。

塩原 正確には覚えていないのですが、伊藤さんと一緒に伺ったような気がします。横浜のご自宅でしたね。創価大学の創価教育研究センター（現：池田大作記念創価教育研究所）でご講演いただいたのは2001年でしたよね。その講演依頼でお伺いしたと記憶しています。2000年が斎藤正二先生の講演で、2001年が高崎隆治先生でしたから、その少し前ですね。

伊藤 私も塩原さんと一緒に伺った記憶があります。あの頃のことを、私も今、思い出しています。私が高崎隆治と初めて出会ったのは、大学1、2年生の頃でした。1994年から1995年だったと思います。横浜で、戦争体験についての講演をされていたのです。その講演では、ご自身の戦争体験とともに、「戸田城聖」という人物がいかに優れた存在であったかについて語られていました。

私はたまたまその講演を聴く機会があり、非常に強い感動を覚えました。高崎はまず、自身の戦争体験を語られました。そして、戦時下において、日本の文学者たちがこぞって戦争に協力していた事実について触れ、さらに戦後になると、それを恥じた作家たちが、自らの戦時中の作品を燃やしてしまったという話をされたのです。

中でも印象的だったのは、菊池寛についてのエピソードです。菊池は学生アルバイトを雇って古本屋から自著を回収させました。その理由は、自身の戦争協力を隠蔽するためで、回収後に書籍を焼却しています。高崎隆治がなぜそのような「秘密の話」を知っているのかというと、実はその回収作業を行った学生アルバイトの一人が、高崎自身だったというのです。

後になって、戦時中の発言がまるで存在しなかったかのように振る舞う作家たちの姿を目の当たりにし、高崎隆治は深い失望を覚えた。そのことが、戦時下文学研究を始める直接のきっかけだったと語られていました。この話は、私にとって非常に衝撃的でした。

さらに講演の後半では、戦時下ジャーナリズム研究の視点から、「戸田城聖」という人物が、いかに卓越した出版人であったかについて、一般向けの講演で熱を込めて語られていました。その姿に私は強く心を打たれ、講演終了後、控室を訪ねて、「ぜひ創価大学で講演をしていただけませんか」とお願いしました。それが1995年頃だったと思います。

その後、1997年、あるいは1998年だったかもしれませんが、実際に創価大学で講演をしてくださいました。その流れの中で、塩原さんもまた「ぜひ高崎先生に講演をお願いしよう」と考えられたのではないかと思います。

ちょうどその頃、創価教育研究センターが設立され、塩原さんたちが準備委員会として中心になって立ち上げを進めておられました。その記念すべき最初の講演者が牧口常三郎研究の第一人者である斎藤正二で、続く2人目の講演者として選ばれたのが、戸田研究の先駆者である高崎隆治でした。そして2001年にふたたび創価大学で講演をしていただいた、という流れになります。

私自身も、こうして振り返りながら、当時の記憶が次々によみがえってきました。そこで改めて塩原さんにお伺いしたいのですが、高崎隆治について、特に心に残っているエピソードでも、お人柄でも、どのようなことでも構いませんので、ぜひ教えていただければと思います。

## 戸田編集雑誌コレクション

塩原 高崎先生がなさっていたことで、今ご紹介があった『小学生日本』『小国民日本』という雑誌の扱いは、非常に印象深いものでした。高崎先生はこの雑誌を長年にわたって古書店で収集し、本当に大切に保管されていました。「大切に」というのは、単に書棚に置くという意味ではなく、わざわざ銀行の貸金庫を借りて、そこに保存されていたのです。

この『小学生日本』という雑誌は、現存数が極めて少なく、号によっては世界に一冊残っているかどうか、というレベルの資料です。私はその雑誌を実際に見せていただいたとき、戸田城聖という人物を理解するためには、まだ発見されていない『小学生日本』『小国民日本』を掘り起こしていくことが、まず第一歩になるのだと強く感じました。そこから私は、高崎先生に導かれる形で、資料収集に本格的に取り組むようになりました。

この『小学生日本』には、寄稿者として、たとえば漫画家の長谷川町子さんが名を連ねています。ご存知の方も多いと思いますが、『サザエさん』を描いた長谷川町子です。彼女がまだ若い頃に、この雑誌に関わっていました。

また、『小学生日本』を小学校五年生のときに愛読していた少年がいます。後に漫画家となる人物ですが、手塚治虫です。『鉄腕アトム』や『リボンの騎士』などで知られる手塚治虫が、ちょうど小学生5・6年生の頃、この雑誌を読んでいたことが、さまざまな研究から明らかになっています。というのも、『小学生日本』には「感蛙（かんがえる）博士と飛男（とびお）君」という漫画が掲載されており、手塚治虫が後に『鉄腕アトム』を描く際、交通事

故で亡くなった少年「トビオ」をもとにアトムが製作されるという設定になっているのです。これは、この雑誌から着想を得たのではないかと指摘されています。

このように、『小学生日本』は非常に重要でありながら、なかなか現物が見つからない雑誌です。しかし、高崎先生の助言と支えを受けながら資料を集めていく中で、最終的には全体の85%を確認することができました。それによって、戸田城聖がどのような教育観に基づいて編集を行っていたのかが、かなり明確に見えてきました。

なぜ『小学生日本』がほとんど残っていないのかについては、その理由の一つとして、刊行された時期が、小学校教育そのものがほぼ機能を失っていた時代だったことが挙げられます。そのため、この雑誌では通信添削による学習が行われており、子どもたちは課題部分を切り取って郵送していました。結果として、雑誌そのものが破られ、保存されにくかったのだと思います。

以上のような経緯があり、私自身、『評伝 戸田城聖』を書くことができた最大の恩人は、やはり高崎先生であったと、改めて深く感じています。

伊藤 私も、横浜のご自宅のことをよく覚えています。「金庫なら火事があっても燃えないから」とおっしゃって、国会図書館でも所蔵していないような雑誌や書籍を大量に所蔵されていました。その中でも、戸田編集の『小学生日本』『小国民日本』については、11冊所蔵されていました。高崎隆治は、それらをすべて自費で集め、横浜の銀行の貸金庫に保管していました。私たちが一度、「コピーを取らせていただけないか」とお願いしたときには、わざわざその金庫から資料を取り出し、ご自宅で直接見せてくださいました。そして最終的に、その貴重な資料を創価大学に寄贈してくださったのでした。

## 戦時下研究の意義

伊藤 ここで、歴史的な資料の持つ意味について、少し補足しておきます。皆さんも実感していると思いますが、今は人工知能や生成AIが急速に発達し、どこまでがリアルで、どこからがフェイクなのか、どこまでがファクトで、どこからが虚偽なのかが非常に分かりにくい時代です。インターネットの世界には、はっきり言えば、有象無象の情報があふれ、書きたい人が書きたいことを書いています。一見すると民主的に見えるかもしれませんが、実際にはファクトチェックのなされていない歴史記述が大量に流通しています。

たとえば、今から80年前の戦争中、日本では政府が紙の配給量まで統制していました。つまり、出版社が戦争を公然と批判することなど、ほとんど不可能な時代だったのです。そのような戦時下の出版物を、戦後に生まれた私たちが目にする、「なぜこれほどまでに戦争協力をしているのか」と、皆が同じような「悪人」に見えてしまう。しかしそれは、戦後、あるいは21世紀の価値観で、80年、100年前の人々を裁いていることになります。100年前の人々は、今とは全く異なる世界観の中で生きていました。政府によって言論の隅々までが統制されていた時代です。だから、今の私たちの目には、一見「五十歩百歩」に見えてし

まう。「どうせ皆、戦争協力をしていたのだろう」と。

しかし高崎隆治は、こう言いました。権力に対して五十歩妥協するのか、五十一歩妥協するのか、五十二歩妥協するのか——それは一人ひとりまったく違うのだ、と。「五十歩百歩」などという言葉で、分かったつもりになって歴史を見るな、と。戦時中の日本人は皆戦争に協力した、などと簡単に言うってしまうのは、歴史をよく理解していない態度だ、と高崎は厳しく批判していました。実際には、人々はそれぞれの置かれた状況の中で、ぎりぎりのところで抵抗していた。五十歩の妥協なのか、六十歩の妥協なのか——その違いは、将来に大きな差を生むのです。

高崎は、そうした視点から、一人ひとりの状況の違いと、その選択がもたらした結果を、冷静かつ厳密に分析しました。たった一文字——それが「は」なのか「が」なのか。その違いによって、文章全体の意味が変わってしまうことすらある。なぜここでこの文字が使われたのか。10通り、20通りの仮説を立て、検証を重ねる。そうした地道な歴史研究の重要性を、高崎先生は非常に厳しく、そして真剣に語っておられました。

塩原さんに改めてお伺いしたいのですが、ほかに特に心に残っているエピソードはありますか。

塩原 本当に、会うたびに励ましてくださったことが、今でも強く印象に残っています。その意味では、改めて、とても温かい方だったと思います。また、奥様とのエピソードも印象深いです。学徒出陣の際、学生たちを見送った多くの女学生の中に、後に奥様となる方がいらっしやっ、という話を、折に触れて語っていただきました。

伊藤 本当にそうですね。高崎隆治は、真実を探求する学者であり、いわゆる世間的に「儲かる」仕事とは無縁の道を歩まれていました。誰も手をつけようとしな分野、むしろ戦争中の文学には価値がないと、多くの文学者や歴史家が見向きもしなかった資料群に対して、「ここを研究しなければ日本の近代史は見えてこない」と考え、新たな研究分野を切り拓いた。しかも当時は、戦時中に活躍した作家たちがまだ存命で、高崎の研究は出版界からも冷遇され、「とんでもない研究だ」と批判されることも少なくありませんでした。そのような状況の中で、奥様はまさに二人三脚で、高崎隆治の研究人生を支えてこられたのだと思います。

温かい人だったという話で、私が思い出すことがあります。高崎隆治とは、晩年に至るまでお付き合いが続きました。私は論文を書くたびに必ずお送りしていたのですが、すると毎回、必ず直筆の感想の手紙が届くのです。振り返ってみると、論文と手紙のやり取りは、全部で50回以上になります。手紙の中では、「伊藤さんの研究は、ここまではとても良い。しかし、まだここが足りない。この点をもう少し調べていけば、もっと歴史のリアルな真実が浮かび上がってくるはずだ」といった具合に、具体的で率直なコメントをくださっていました。

私は昭和生まれだからかもしれませんが、学問というのはやはり厳しく鍛えてもらいたい、という気持ちが強い人間です。今の皆さんからすると、私のこうした考え方は、少し威圧的に感じられるかもしれませんが、しかし私は、自分がいかに知らないかということを、きちんと

と教えてくれる人に学びたいと思ってきました。その点で、高崎の指導は本当に厳しくも温かいものでした。毎回、便箋に何枚も何枚も、分厚い手紙を書いてくださる。その手紙が届くのが、私は楽しみで仕方なかったのです。

高崎隆治と私とでは、年齢が50年ほども離れていました。感覚的には、祖父と孫ほどの差があったと思います。それでも私を一人の研究者として、また一人の人間として、常に対等に扱ってくださいました。そこには、分け隔ても、偏見も、一切ありませんでした。その姿勢に触れるたびに、高崎隆治という人は、学者としてだけでなく、人間としても本当に稀有な存在だったのだと、改めて感じさせられます。

さて、今日は、今から20年ほど前になりますが、高崎先生が創価大学で講演された頃、その講演会の準備と一緒にされていたOBの方がいらっしゃいます。その方が、今日「高崎隆治を記念するシンポジウムをやるなら、ぜひ行きたい」とおっしゃって、わざわざ来てくださいました。そこでぜひ、自己紹介とともに、高崎先生についてのお話をさせていただければと思います。31期生の上原淳司さんです。よろしくお願いします。

上原 はじめまして。31期生の上原淳司と申します。ほとんどの方にとって、知らない人から知らない人の話を聞くという状況になっているかと思いますが、少しお話しさせていただきます。

すでにご紹介がありましたが、高崎隆治という方は、何百万もの命を奪った日本の戦争について、一生をかけて考え続けた人です。ちなみに、ウィキペディアなどを見ると、「学徒兵として召集」と簡単に書かれていますが、これはかなり省略された説明です。正確には、志願兵になれば一定の特権を得られた時代に、あえて志願せず、召集されるまで兵士にならなかった人物です。そのため、入隊後も「なぜ志願しなかったのか」と、難詰され、殴打されるなど、過酷な目にあっています。

なぜ志願しなかったのかについては、いくつもエピソードがありますが、一つだけ紹介します。戦時中、売れっ子作家に火野葦平がいました。特に有名なのが『麦と兵隊』で、同じシリーズに『土と兵隊』『花と兵隊』があります。高崎隆治は、この中から『土と兵隊』を手に取ります。理由は特別なものではなく、小遣いで買える範囲だったから、というものです。

この『土と兵隊』には、中国戦線での戦闘の様子が描かれており、捕虜となった中国人少年兵が登場します。しかし、その少年の描写は、突然別の場面に切り替わってしまうのです。これは当時の検閲によるものでした。検閲への対応には、「××」のように伏せ字にするもの、書き換えるもの、そして削除するものがありますが、この箇所は削除されていました。それも、一つの空行もなく、削除の痕跡がわかりにくい形でした。

文学的な省略表現のようにも見えるのですが、当時の少年・高崎隆治は、何かしらの断絶があると考え、「この少年兵は、殺されたのではないか」と推測します。そして、捕虜となった少年を殺すような戦争は正義ではない、と判断し、不利益を承知で志願しなかったのです。事実、高崎の推理どおり、戦後に出た『土と兵隊』には、捕虜数十名が殺されたことが書か

れています。(なお、火野自身が、虐殺に加わったわけではありません。)

戦後の高崎は、「あの戦争はなんだったのか」と、問い続け、徹底して資料を集めていきます。高校教員でしたので、修学旅行なども利用して、地方の古本屋を探し回ったそうです。しかし、それでは時間が足りないと考え、給料が半分以下になることを承知のうえで、非常勤講師の道を選びました。こうした生き方からも分かるように、戦争や命に対する思いは強く、安易な言動や研究に対する目は、非常に厳しい方でした。その高崎隆治が、後半生の研究テーマとしたのが、戸田城聖、創立者・池田大作、そして創価教育学会と関わりのある里村欣三であったという事実を、重く受け止めたいと思います。

もう少し補足しますと、現在のウィキペディア記事に「創価学会・団体系の人物」と書かれています。確かに『第三文明』や『潮』への執筆は多いのですが、そのために、創価学会に批判的な人々からは、「高崎は学会に胡麻をすっている」と中傷されることもありました。一方で、ごく一部からではありますが、創価学会員から「信仰していないあなたに、戸田先生の何が分かるのか」と詰問されることもあったそうです。つまり、あまり良い目にあっていないのです。

それでも高崎隆治は、損得ではなく、戸田城聖の研究、池田大作の研究、里村欣三の研究を続けました。本日お集まりの皆さんの中で、お1人でもお2人でも、そうした姿勢や研究に興味を持っていただけたなら幸いです。以上です。

## 日米開戦時の5つの予言

伊藤 創価大学で行われた高崎の最後の講演があります。85歳のとき、90分間立ったまま、講義形式で最後の講演をしてくださいました。題は「戦時下の1943年、夏を語る——創価教育学会弾圧の前後」です。ここでは、高崎隆治の「証言」とも言うべき語りが、記録として残されています。この講演の中で高崎は、次のような回想を語っています。

1941年12月8日、日本が真珠湾攻撃を行い、アメリカに宣戦布告、太平洋戦争が始まった。当時、高崎は16歳でした。その日の夜に親の前で「戦争の見通し」を語ったと言います。しかも、5つの「予言」をしたのだ、と。

- 1) 東京と横浜は焼け野原になる。
- 2) その前に、頭の上に原爆が落ちる。
- 3) その直前に、ソビエトが参戦する。
- 4) しかし、そうなる前に、自分は戦場のどこかで死んでいる。
- 5) 戦争は昭和20年に終わる。

1941年は昭和16年ですから、高崎は、結果的に5年先までを見通していたことになります。では、なぜそれが可能だったのか。高崎はこう説明します。

高崎が学んでいた学校の教員に、海軍関係の事情に通じた人物がいて、日本の海軍が保有する石油、つまり艦隊を動かす燃料が、どの程度もつかという計算を教えてくれた。備蓄は

概ね2年分で、仮に艦艇が沈めば沈むほど燃料消費は減るから、最終的に3年程度は持つだろう。昭和16年から数えれば、昭和19年頃までが限界で、昭和20年には戦争は終わる——そういう現実的な見積もりが成り立つ、というわけです。

では、なぜ原爆が落ちることまで予見できたのか。高崎は、昭和16年の段階で、少年雑誌や科学雑誌に、すでに世界の科学者たちが原爆開発に取り組んでいることが紹介されていた、と述べます。そこには、原爆開発には2つの条件がある、と書かれていた。すなわち、最高の経済力と、最高の頭脳です。当時、「最高の頭脳」はドイツにあると考えられていた。しかし、ヒトラーによるユダヤ人迫害によって、アインシュタインをはじめとする著名な学者たちがドイツを離れ、アメリカへ亡命した。その結果、「最高の頭脳」はドイツからアメリカへ移る。アメリカは圧倒的な経済力をもつ。したがって原爆を開発するのはアメリカである。そして、そのアメリカに日本が戦争を仕掛ける以上、原爆は必ず日本に落とされる——高崎先生は少年ながら、そう判断したというのです。だからこそ、高崎は、政治家たちが「原爆が落とされるなど思いもしなかった」というのは、後になっての言い訳に過ぎない、と語っていました。

この講演は、1943年という戦時下のただ中で、牧口と戸田がどのような状況で投獄されていったのかを、同時代を生きた当事者の視点から証言するものでもあります。

塩原さん、上原さん、他に何か思い出されるエピソードはありますか。

上原 何度かお話しさせていただく機会がありました。ただ、私には専門的な話ができないので、何を質問すればよいのか分からず、それでも、高崎先生が非常勤講師として経済的な不利益を引き受けながら研究を続けていたことは有名でしたから、「なぜそこまで志を貫くことができるのですか」とお聞きしたことがあります。

すると先生は、こう答えてくださいました。——朝鮮の方たちが従事して建設された、ある駅がある。完成後、彼らの住んでいたバラックは突然壊された。その時にいたのは、女性と子どもだけだったが、警官たちはサーベルのさやで女性を叩きながら立ち退きをさせた。ちょうど自分は、母親とその場面を目撃し、ただただ震えるだけだった。ケガをした女性のなかに、知人がいて、その夜、包帯をした姿で別れを告げに来た。

自分は、その人たちを見て、決して彼らをいじめる側には立たない。必ず彼らのために生きる、と決めた。そうでなければ、自分が生きている価値はないと思って生きている——先生はそのようにおっしゃいました。この言葉は、今でも私の心に深く残っています。

## 戸田研究の今後

伊藤 高崎隆治は本当に温かい方でしたし、既存の枠組み、世の中で「良い」「悪い」とされている通念を、いったんすべて自分の目で確かめ直す。徹底してファクトを確認する。そういう意味で、実に公明正大さを備えた方だったと思います。

最後に、高崎隆治の研究を踏まえつつ、今後の戸田城聖研究について伺いたいと思います。

塩原さんが、高崎から受け取った研究上のメッセージをどのように受け止め、今後どのような点に取り組もうとしておられるのか。また、現在進行中のご研究についてでも結構ですので、お話しいただければ幸いです。

塩原 これは、むしろ皆さんへのお願いという形になるかもしれません。戸田城聖という人物は、戦前、青年期にあたる時期だけでも、学習参考書を27冊執筆しています。しかし、そのうち現在までに何らかの形で確認されているものは、半数にも満たないのが現状です。今年(2025年)も、青森県弘前市の小学校が所蔵していたもので、これまで他では確認されていなかった戸田先生の参考書が1冊、新たに発見できました。

そういう意味で、戸田城聖研究の基盤を整えるためには、戸田が執筆した学習参考書がどこに存在しているのか、また、いつ、どのような形で再発見されるのか分からない中で、地道に探し出し、戸田の教育実践の全体像を明らかにしていく必要があると考えています。先ほど『推理式指導算術』の紹介がありましたが、実は戸田は『推理式指導読方』『推理式読方指導』という形で、国語の参考書も数多く執筆しています。弘前で見つかったのは指導読方普及版でした。さらに他の巻も見つけ出したいと考えています。

鶴見俊輔さんの話に関連して付け加えますと、鶴見さんは小学校時代、成績が振るわず、附属の上級学校への進学が難しいと教師から告げられたそうです。しかし、鶴見さんのご両親は、「そんなことを言う学校に行く必要はない」と判断し、『推理式指導算術』や『推理式指導読方』、さらに創価教育学会員の教師による家庭教育を受けさせました。その結果、当初は進学予定ではなかった学校に合格し、さらにハーバード大学へ進学するに至った、という経緯があります。

このエピソードからも分かるように、戸田城聖という人物は、「どのようにすれば子どもたちの可能性を最大限に引き出せるのか」という勘所を、実践を通してつかんでいた人物だと思えます。そうした視点から、ぜひ皆さんにも戸田城聖の教育を学んでいただき、そこから何らかのヒントを得ていただければと願っています。以上です。

伊藤 高崎隆治という名前を、日本の学術データベースであるCiNiiで検索すると、戸田城聖に関する論考が数多く出てきます。今、塩原さんから鶴見俊輔の話がありましたが、それ以外にも、戸田の出版社「日本小学館」が行っていた全国規模の模擬試験に関するエピソードがあります。

この模擬試験は、東京および神奈川を中心に実施されていましたが、高崎隆治自身も受験したことがあるそうです。高崎は晩年、こんな話をしていました。模擬試験を受けに行った際、会場に背の高い眼鏡をかけた監督員がいた。ところが、高崎の友人が受験票を忘れてしまい、受験できないと慌てていた。そこで高崎が、そこにいた監督員に「受験票を忘れてしまったのですが、受けられないでしょうか」と相談すると、その人物は即座に「受ければいいじゃないか。僕が書いてあげるよ」と言い、その場で受験票を作り、「1001番」と番号を書いて渡してくれたというのです。

当時、その模擬試験の受験者は1000人もいなかった。つまり「1001番」という番号は、その友人ただ一人のためのものでした。誰の許可も仰がず、その場で判断し、行動したその監督員のおかげで、高崎の友人は模擬試験を受けることができた。高崎は後年、戸田城聖の写真を見て、「少年時代に友人を助けてくれた、あの優しい監督員は、もしかすると戸田城聖本人だったのではないか」と語っています。当時は名前を尋ねる余裕もなく、ただ試験を受けることに必死だった。しかし、日本小学館、戸田城外名義で行われていた模擬試験の主催者であった戸田城聖が、神奈川の会場に来ていた可能性は十分にある、と。

牧口常三郎は、受験地獄から子どもたちを救いたいという思いから『創価教育学体系』を著しました。しかし現実には、受験制度は存在し続ける。そこで戸田は、子どもたちが喜びをもって学び、自らの人生を切り拓けるようにと、父母や教師のために『愛児の優等化』などの教育書を著し、『推理式指導算術』『推理式指導読方』といった学習参考書を編み、さらに模擬試験まで実施しました。高崎隆治は、「自分は戸田城聖本人に、どこかで出会っていたのかもしれない」と、そんなふうに語っていました。

## 質疑応答

伊藤 残り時間で質問のある方はいらっしゃいますか。

学生 現代に生きる私たちは、高崎隆治先生のどのような考え方を、日常生活や社会の中で参考にするとよいのでしょうか。

塩原 難しい質問ですね。ただ、一つ言えるとすれば、高崎先生の思考の根底には、「戦争は絶対にしてはならない」という、非常に明確で揺るがない信念があったと思います。そして、その信念こそが、戸田城聖という人物への強い関心と研究へとつながっていったのではないのでしょうか。

そういう意味では、ずるずると流されるようにして戦争や暴力に加担してしまうことが、決してあってはならない、という姿勢を、私たちは学ぶべきだと思います。戦争の悲惨さを実体験として知る人だからこそ発せられる言葉や態度があり、高崎先生はまさにそのような立場から、強い警鐘を鳴らし続けた方でした。

実は私は、ケネディについて少し研究をしています。ケネディがなぜ核実験の停止という決断に踏み込むことができたのか。その背景には、彼自身の戦争体験があると思います。戦時中、魚雷艇に乗っていて、日本の駆逐艦の体当たりによって、艇が真っ二つにされ、海に投げ出されるという極限の体験をしています。そうした体験を通して、戦争がいかに悲惨なものかを身体で知っていた。その時の体験が、大統領就任後の行動に深くかかわっているのではないかとと思っています。

この点では、池田先生も戸田先生も同様に、戦争というものを切実な現実として経験しています。そうした思いを受け継ぐ場として、「平和を守るフォートレス」という言葉をいただいている創価大学で学んだ学生として、また卒業生として、その責任を心に留めて生きて

いきたいと思っています。以上です。

伊藤 今のお話を聞いて、私自身、高崎隆治に初めてお会いしたときのことを思い出しました。当時、高崎は70歳前後で、私はお話を伺えること自体が本当に光栄で、感動していました。その講演後、講師控室で、私は一つ質問をしたのです。

高崎は、マスメディアが人々の考えを、ある方向へと偏らせていくことの恐ろしさを、非常に厳しく批判しておられました。そこで私は、「マスメディアを批判するためには、どうしたらよいのでしょうか。結局、マスメディアを批判するためにも、他のメディアを読まなければならない。情報を通してしか情報を批判できないのではないのでしょうか」と尋ねました。

すると高崎は、「その通りなんだ」とおっしゃいました。私たちは、どこまで行っても情報を通してしか情報を批判できない。だからこそ、できる限り多様な情報に触れながら、その情報が「誰にとって得をする情報なのか」、つまり、どのような文脈、どのような意図のもとで発信されているのかを、常に考え続けるしかないのだ、と。難しい問題だが、悩み、考え、努力し続けるしかないのだ、と語ってくださいました。

今、皆さんはインターネットやSNSをはじめとする、非常に複雑で厳しい情報環境の中に生きています。しかし、自分の知性を信じ、学び続けてほしい。その言葉を、私は今でも大切にしています。皆さんにも、参考になればと思ってご紹介する次第です。

本日、私たちは高崎隆治という一人の研究者の生涯と思想を通して、歴史に向き合うとはどういうことか、学問とは何のためにあるのか、そして戸田城聖という人物が現代に投げかけている問いの重さを、改めて考える機会になったと思います。権力や時代の空気に安易に流されず、事実を事実として見つめ、弱い立場に置かれた人々の側から歴史を問い直す姿勢は、現代においてますます重要になっています。今日のシンポジウムが、単なる過去の回顧にとどまらず、皆さん一人ひとりが自分自身の生き方や学び方を問い返す出発点となり、未来に向けて「何を守り、何を選び取るのか」を考える契機となることを願って、結びといたします。

塩原さん、上原さん、貴重なお話をお聞かせくださり、ありがとうございます。